

くも
『蜘蛛の糸』
芥川龍之介
あくたがわりゆうのすけ

— ある日の「」とで「」をいます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、
ひとりで「」お歩きになつていらつしやいました。池の中に咲い
ている蓮の花は、みんな玉のよつ白で、そのまん中にある
金色の蕊からは、何ともいえないよい匂が、絶間なくあたりへ
溢れております。極楽は丁度朝なので「」しましょう。

「」おしやかさま おたたす おもて
やがて御釈迦様はその池のふちに御竹みになつて、水の面を
おお はす は あいだ
蔽つている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。
「」はすいけ した ちやうびの「」そ「」あた
「」の極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当っておりますから、
すいしやうつ す とお さんず かわ けしき
水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、
ちやうびのぞ めがね
丁度覗き眼鏡を見るように、「」はつきりと見えるので「」をいます。

するとその地獄の底に、犍陀多という男が一人、ほかの罪人と
「」に蠢いている姿が、お目に止まりました。「」の犍陀多とい

う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた
 大泥坊でございしますが、それでもたった一つ、よい事を致した覚
 えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通
 りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這って行くのが見えまし
 た。そこで憐陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、
 「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その
 命を無暗にとるといふ事は、いくら何でも可哀そくだ。」と、「どう
 急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったから
 でございます。」

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この憐陀多に
 は蜘蛛を助けた事があるのをお思い出しになりました。そうして
 それだけのよい事をした報には、出来るなら、この男を地獄から
 救い出してやろうとお考えになりました。幸い、側を見ます
 と、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、
 美しい銀色の糸をかけております。御釈迦様はその蜘蛛の糸を
 そつとお手にお取りになって、玉のような白蓮の間から、遙か
 下にある地獄の底へ、まっすぐにそれをお下しなさいました。

二

「こちらは地獄じごくの底そこの血ちの池いけで、ほかの罪人ざいじんと一いっしよに、浮ういたり沈しずんだりしていた犍陀多かんだたでございませう。何なにしろどちらを見ても、まっ暗くらで、たまにそのくら暗やみからぼんやり浮うき上あっているものがあると思おもいますと、それは恐おそしい針はりの山やまの針はりが光あるのでございませうから、その心細こころほそさといつたらございませぬ。その上あたりは墓かぶつの中なかのようにしんと静しずまり返かえって、たまに聞きえるものといつては、ただ罪人ざいじんがつかすか微たんそくな嘆息たんそくばかりでございませう。これはこへ落ちて来るほどの人間にんげんは、もうさまさまな地獄じごくの責せめ苦くに疲つかれはてて、泣なみ声ごゑを出いす力ちからさえなくなっているののでございませう。ですからさすが大泥坊おおひろうぼうの犍陀多かんだたも、やはり血ちの池いけの血ちに咽むせびながら、まるで死しにかかった蛙かわずのように、ただもがいてばかりおりました。

ところがある時ときの事ことでございませう。何なに気げなく犍陀多かんだたが頭あを挙げあげて、血ちの池いけの空そらを眺ながめますと、そのひっそりとした暗やみの中なかを、遠とほい天てん上じやうから、銀色ぎんいろの蜘蛛くもの糸いとが、まるで人目ひとめにかかるのを恐おそれるように、一いっすじ細こく光ありながら、するすると自分おのれの上うへへ垂たれ

て参るまゐるのではいませんか。犍陀多かんだたは「れを見ると、思わず手を拍うつて喜びました。「の糸いとに縋すがりついて、ど「までもものぼって行けば、きつと地獄じごくからぬけ出せるのに相違そうゐいしません。いや、うまく行くと、極楽ごくらくへはいる事ことさえも出来ましよう。そうすれば、もう針はりの山へ追い上げられる事こともなくなれば、血の池ちに沈められる事こともある筈はずはいけません。

「うと思いましたからは、早速さつそくその蜘蛛くもの糸いとを両手りょうてでしっかりとつかみながら、一生懸命ごうじやうけんめいに上あ上あとたぐりのぼり始めました。元もとより大泥坊おおひじりぼつの事ことでいますから、「ういう事ことには昔むかしから、慣れ切なれきっているのでいます。

しかし地獄じごくと極楽ごくらくとの間あいだは、何万里なんまんりとなくいますから、いくら焦あせつて見た所ところで、容易よういに上あへは出でられません。ややしばらくのぼる中うちに、とうとう犍陀多かんだたもくたびれて、もう一ひとたぐりも上あの方ほうへはのぼれなくなつてしまいました。そこで仕方しかたがいけません

から、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、
遙かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼった甲斐があつて、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれております。

それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になつてしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。毘陀多は両手を蜘蛛の糸にか

らみながら、「こへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限もない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。毘陀多はこれを見ると、驚いたのと

恐しいので、しばらくはただ、莫迦のように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしておりました。自分一人でさえ断れそうなのこの細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事が出来ましょう。もし万一途中で断れたと致しましたら、折角

「二へまでのぼって来た」の肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大變でいいます。が、そういう中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上つて、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼって参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまつのに違いありません。

そこで犍陀多は大きな声を出して、「三ら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚きました。

その途端でいいます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下つている所から、ぶつりと音を立てて断れました。ですから犍陀多もたまりません。あつという間もなく風を切つて、独樂のようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まつかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでござります。

三

御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、「この一部始終をじっと見ていらつしやいましたが、やがて憍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな顔をなさりながら、またぶらぶらお歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、憍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様のお目から見ると、浅間しく思召されたのでござりますよう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様のおみ足のまわりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何ともいえない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れております。極楽ももう午に近くなったのでござりますよう。

★テキストは、「青空文庫」(『芥川龍之介全集2 ちくま文庫』より)を基にし、ふりがなを追加したり、漢字をひらがなに改めたりしています。